

[迫り来る法改正／時代変化の荒波－33：IoT×生産性による全体最適の本質]  
＜序文＞

前号では、IoTの進化の先にある、私達個々人の行動や意思までがデータ化、つまり、個が量化され記号化され、同時に特定化されてしまう近未来の世界を、斜めの節穴から少しだけ覗いて見た訳ですが、そこから垣間見えたのは、この処当局が並べ立てている「利便性」「効率化」「無駄や重複の一扫によるコストの削減」「生産性の向上」等の政策屏風の背後から、時々顔を覗かせる主役の姿です。不便・不都合な環境を脱却し、先進的で合理的な社会秩序を形成するには、これしかないと思わせるキャッチフレーズ。もしそれが主役だとするなら、では一体、その正体は何なのか？恰もハーメルンの笛吹き男が吹く魔法の笛の様に、私達を引き寄せ、誘い、思考停止に陥らせ、何処にでも追従させてしまう程の威力を持つ「笛の音＝キャッチフレーズ」とは？恐らくそれこそが、流行りのマジックワード、「全体最適」に違いありません。

全体最適は、一般的に部分最適、とりわけストーリー性のあるテーマのときは、部分最適の総和との比較に於いて使われる概念です。例えば、部分最適を追求して行くと、個々のレベルでは美德とされる質素儉約が、全体に波及すればするほど消費は減退、景気減速を招き寄せる原因となりかねず、これが個別企業ベースになると、経営組織を構成するそれぞれの部門が、最大限の経費削減を図ろうとすればする程、モラル低下、売上げ減少、経営体力衰退等をもたらす「合成の誤謬」に陥る－それゆえ「いかに優れた部分最適も全体最適には勝てない」(P・ドラッカー)と云う結論が導かれるのです。確かにメドレーリレー等の競技では最速泳者を揃えても優勝できない事もあり、個々のベストの集合が全体のベストとは限らない、という場面を私達は屢々目撃し、実体験もしている訳です。

けれども、だから「部分最適の総和は全体最適には及ばない」とする、最初から全体最適優先、全体最適ありきから始まる議論には、注意が必要ではないかと思うのです。全体、と云ってもそれらは、一定の時間枠や一定の領域、一個の事業体等、所与の条件下で確認される個々の事実を示すものに過ぎず、普遍的帰結ではないからです。殊に統治者である政策当局が要求する全体最適は、当然、別の意味合い、例えば個別の事情や個々の正論、少数の異見に出る幕を与えず、有無を言わさない－という権柄づくの思考が背後に控えている、と考えると合点が行くからです。

先進的で合理的な社会秩序形成に、何か問題でもあるのか？－という、一切の反論を許さない、威圧的ともいえる姿勢の陰に潜んでいるのは何なのか…検証して見たいと思います。